

一、東西方言の推移・対立の過程において、徳川期は東西勢力逆転の時代である

(西)

(期良奈)

(期安平)

(期町室・倉鎌)

(東)

奈良朝・平安朝の昔から、日本語の主流は常に平城・平安京を中心に流れ、東国語はだみたる言葉、うちゆがみたる声として蔑視されて来た。然し東国の武士が漸く勢力を伸ばし、やがて頼朝が幕府を鎌倉に樹立して以来、政権は武門に受けつがれ、勢い東国の言葉は段々として京にも侵入してゆく。

「公家の人々、いつしか云ひも習はぬ坂東。声を使ひ、著もなれぬ折烏帽子に額を頭して、武家の人に紛れんとしけれども、……」
とは太平記(三天下時勢^{いまやうすがた})の叙する所。

一、六〇〇年関ヶ原の戦の後、家康幕府を江戸に開くや、こゝはやがて百万の大都会となり、文化・経済の面においても京阪と拮抗し、遂に之を凌駕する。徳川期を国語史の上で二元(文語↓口語)、対立(西↓

(徳川期)

(期京東)

東)の時代と見た安藤正次氏は、

「江戸言葉が上方言葉より優位を占めるものであるとして、江戸っ子の自慢の種となつたのは、おそらく化(1809—1817)政(1818—1829)の頃からであらう。」(国語史序説136ペ)

(期京阪)
という。化政期の後一世紀足らずで世は維新(1868年)を迎え、明治の近代日本となり、江戸語は東京語となる。昔では西側から蔑視され続けたあずま言葉が、今や首都の言葉として、そして全国共通語の中核として栄えているのである。

二、徳川期における中国地方方言研究の概観

徳川期は日本語研究の礎地が開かれ、方言研究も勃興した時代である。今、中国地方方言研究の文献一、二をあげる。

(1)きりしたんの研究物

サビエルの鹿兒島流着は天文十八¹⁵⁴⁹年八月で、翌年秋山口を経て

京に入る。その翌年帰路再び山口に立ちより、五カ月滞在布教したが、秋豊後に着き、冬豊後を発し印度に向う。その後イエズス会は、1603—4年日葡辞書の正編・補編刊行。方言約五百語を収む。

1604—8年ロドリゲスは日本大文典^{三卷}を著し、日本語を九州(下)中国都関東(坂東)の四ブロックに分けて観察している。そのうち「中国のことは」について曰く、(第二巻単語の条)

中国 (CHŪGOKU)

○中国のものは発音する時、開がる発音を過大にして、口を開き過ぎて一種高ソノソネテを起す。例へば Narumai (なるまゐ) の代りに Naruma (なるまゐ) と云ふ。又 Aguezatta (あげぢた) maizazatta (まゐぢた) のやうに否定動詞の Zaru (ぞる) Zu (ず) を普通に使ふ。(土井訳本608頁)

備前 (BIEN)

○他の動詞に接続する際には、形容動詞の o (オウ) o (アウ) ro (ウ) に終る語根に助辞 Ni (に) を添へる。例へば Texuni zonzuru (嬉しうに存ずる) Medzuraxuni gozaru (珍しうに存ずる) Chano atquni tatei (茶を熱うに立てら) など。

○Bの前の母音は半分の鼻音を以て発音するのであるが、備前のもので発音ではそれを除いてゐて、干からびた発音をする。例へば Togā (料) の代りに Toga (とが) Soregaxi (某) などと云ふ。この発音をするので備前の者は有名である。(土井訳本612頁)

(2) 浮世鏡^{第三} (著者未詳 貞享五 1688 年刊)

序に「かたこと」の補遺として編したとあり、京都語を中心に310

条をとりあぐ。京都語の外は(数字は「かたこと」考(笠間選書122)の、頭注浮世鏡^{第三}に付した項目番号による。)

余国 88 東 88 121 158 308 賀州 206 西国 158

の七条と

備前・中・後 91 122 222 備前・美作 128 129 中国 90 91 111 116 121 218 245 268 289

308

の十五条あり、中国方言の取り上げの多いのが注目を引く。著者は何らか中国に關係ある人であらう。但し

「かたこと」281条に、二月を。にんぐはち。四月をしんぐはち。共

…よしと云り。とあるに對し、

浮世鏡^{第三}224条は、しよんぐはつ 正月 にん月 しん月同

として「しよん」「にん」「しん」の鼻濁音を否定する。蓋し著者は京都出身ではなく、鼻濁音を有たぬ中国生れ、それも東南部の備

州あたりの出身であらうかとも推察される。

三、防・長方言をとりあげた文献

(1) 地誌・物産

○ 新入国記 (著者未詳) にいう、

〔周防〕 (省略)

〔長門〕 当国の風俗は万事に差掛たる事なく、人の音声も下音に、上調子たる事なし。……

○ 毛吹草 (七卷 松井維舟 正保二 1645 年刊) に産物をあげて、

周防 山代半紙 梶原 鳥子 漆 菟藟玉 鹿皮 鮎 山口結鹿子

紫染 薊蕪 小荷 駄荷鞍 諸大名乗替ノ
為ニ求之 香積寺三重額 湯田二月

箒(巻四)

長門(省略)

(2)本草学書に現れる防・長方言

長門産物名寄、周防産物名寄なる写本が、萩図書館に在る。山口県文書館のは長門国産物、周防国産物と題し、序には「合わせて両国本草と呼ぶ」と記す。物名に方言が出る。

○長門産物名寄の例(第一頁)

魚類 介甲類 鳥類 獸類 (虫類) 蛇類 菜類 菌類 瓜類
果類 木類 草類 竹類 穀類

と目を掲げ、以下各類を列挙詳説する。瓜類の例、

瓜類

カモウリ とつぐわとも申候
冬瓜
イトウリ
丝瓜 へちまとも申候

○周防国産物名寄の例(第129ページ木類)

コシアブラ シヤクシ木 ハグチヒ
ニマメノ木 山タテ、大タテヒ ニシコギ 他郡ニネヅミノフロント云
トリデノキ トビキ 又正ドウボウト云
デゾウガシラ 長州ニウツミ カネカブリ 長州ニシワギト云
ワクラワ 土手カブリ クロガネモドキ
黒ガネカブリ カネカブリ カヂヤタカネ

産物の名には別名、俗名、方言を列挙しているのが目につく。

同種の書類を岩国藩に見ると、「吉川左京領内産物并方言」と題

覧見 徳川期における防・長方言の文献・語彙資料の一、二

する写本がある。例(○点は筆者)

草類

一 オニユリ(巻丹)

其種 ヤマゴウラ(番山丹) シヤクゼウユリ ゴウラトモ

サ、ゴウラ ハタユリトモ

一 ドクダミ(蕺菜)

ケイセイサウ ノハイタナ カキダノシトモ

此の書は端本ながら今年二月、岩国徴古館より出刊され、右の○を付した語を方言と見てゴチック印刷にしている。

なおこの種調査書の控は徳山、長府、清末各支藩にもある。

蓋し徳川期は、早く慶長十二年に明の李時珍の本草綱目五二巻を輸入し、之を根幹として本草学が起り、栄えた時代である。中でも稻生若水は加賀藩命を受けて庶物類纂三二巻を編集した(元禄九年)が、その後將軍吉宗は丹羽正伯に増補を命じた。よって正伯は幕命を以て三百諸藩に資料の提出を求め、元文三年増補版七〇巻を完成した。先の両国本草などはこの時提出した書類の控なのである。この時、長州本藩で調整した書類は六十部にも達したという。

本草学は草木を主とし、動物、鉱物も含めて薬餌・食料に資する学問である。そこでは物と名との一致が肝要なので、勢い俗語、別称、方言の研究を伴い、之を列挙することとなり、かつ多くは写生の図面をつけることにもなる。(今、残存の控書には図面は省略されている。)写本に左の注意書が添付されている。

ケ様の類ハ広く諸国ニ而不唱名ニ而候故何れも江戸辺にては何京都辺ニ而は何と申儀御書添可成候万一夫も知レカネ候バ絵図ニ被

成莖葉花実并大小時節之註等御添別本ニ御認可成候何レ之部ニ不
限惣跡此例にて御認可成候勿論何国にても多く唱候名ハ不及其儀
ト

(3) 通辭・問答類

江戸三百年間は封建制下の藩政が続くが、大名には参覲交替の義
務があり、隔年毎に格式に応じた人数を整えて江戸へ往復の旅をし
たし、また江戸での生活があり、常に大名の妻子、江戸詰め定府藩
士の生活があった。各藩では他藩との応対や、旅中及び江戸生活に
事欠かぬよう、通辭・問答の教科書を作った。長州藩のそれは布施
御牆作の他所問答（自他問答、自他問対とも）で、

一、御手前様にハ執之御家中に御座候哉

長州家中何条何某と申者に御座候

に始まる一連の挨拶用語の虎の巻である。

武士言葉には一定の型があるが、やはり江戸における武士達の用
語、江戸城を中心に話された武士言葉が標準となつた。参覲交替に
従つた藩士たち、江戸詰め定府の藩士は標準武士言葉を經驗し修得
すると共に、郷藩の方言を反省する。各藩で作られた通辭・問答書
には、かくて往々に戒めとしての自藩の方言集が附録される。長州
藩の他所問答には、「相用ひ問敷詞大概」として115語を載せている。

相用ひ問敷詞大概

一 一つさいちうに

一 しらんげな

一 かうじやのつて

一 しやつちきり

一 おしられる

一 こわい（總計115語）

なお東条氏は世良孫右衛門「言葉合せの大概」（天保年間）な
る書もあげているが、所在不明で内容を確認できず、こゝに取り
上げなかつた。

(4) 紀行文に見る防・長方言

防長二州は山陽道の西端に位し、九州につながる。その山陽道は
奈良朝の古より一級国道である。ここを往来した人々は数限りな
く、紀行文を残した人も少なくないのだが、然し防長方言を紀行文
の中に見出すのは容易でない。蓋し紀行文は概して文語で書かれ、
雅語が用いられ、方言の入りこむ余地が無いからである。僅かに一
茶の文中に、次の語を見る。

○西国紀行（全集巻五44ペ）

のんこといふは、あきら〔防州下津令の俳人明良〕うしの仕奴
也けり。

……（略）……

峠と云 周州

またを マンタと云

○同（ク 46ペ）

一、周防にて峠をタヲと云ひ、調市をノンコと云也。

○方言雑集（全集巻七 543ペ）

アンタ周防下輩をいふ。

備考 方言雑集は一茶が長年の旅の道中に見聞せる方言を記録し
たもので、収容語1827語。郷里の信濃を中心に、足跡は関東、近
畿、四国、九州に跨がり、かつ生涯書きついでという。

(5) 文学に現れた防長方言

○新井無二郎の「防長方言考」の附録にいう、

一、防長語と狂言記

狂言の言葉と、防長の方言とは、殆ど皆同一系統の語である。ゆゑに防長に生れた吾々は、狂言を読むと、非常におもしろく、なんとも云へないなつかしさをおぼえる。……今狂言記の中から、一小部分を抜きだして、防長語との共通を示さう。

大名こりやなんじや （狂言末広で御座りまする

大名これがや

大名イヤ末広で候ふの、ざれ絵で候ふの（末広）

二、防長語と近松の浄瑠璃

近松の書いた浄瑠璃を読んで、其の文句に防長語が満ちてをるのを見て、近松は必ず防長人であると自分は考へる。……防長語も、関西の關係上、京阪語との共通は、勿論あるけれど、防長特有の語は、他では見られない。其の他では見られない所の語を、近松は微細に用つてをる。これは長州人でなければ、出来ぬ芸当である。今、近松の世話浄瑠璃の中から、防長語を挙げて……立証しようと思ふ。

ア、しんどうやと腰うちかけ、
シヤハセ

仕合のわるい時は、なんで損をせうもしらぬ。

ずるぶん弓矢のけいこせい出し申さうぞ。

（夕霧阿波鳴渡）

興味ある論ではあるが、この意見を正当化する為には、少なくとも狂言の作られた室町末期、近松の活躍した元禄期までに、之らの言葉が防長で使われていたことを示す確かな文獻資料を示して証明

管見 徳川期における防・長方言の文獻・語彙資料の一、二

せねばなるまい。現代の防長語を狂言記や近松の浄瑠璃と比較して類似を訴えるのでは逆である。

○江戸末期に方言を滑稽文学に登場させ、成功したのは三馬や一九である。それらの中に防長方言が使われていないだろうか。一九の宮嶋道中膝栗毛の序文に、

……防州穴の口といへるに着く 此難波に遭て、復び乗船を怕

れ、上陸して浪桑に帰る序なればと芸州宮嶋に詣でたりしが、

穴の口より 宮嶋へ四里 誠に聞けるよりは視るに驚きて……

宮嶋から四里という防州穴の口とはどこか。岩国の人にきけば、現に新港区にその地名が在るといふ。さては一九により防州方言が取りあげられるか、と思つて本文を見ると、宮嶋参詣の記事はあるが、四国からの舟便が難波して防州に着くという序文の構想は捨てられている。

(6) 民謡、田植歌の類に出る防長方言

この種のもは県下至る所に存在する筈である。今、山口県では比較的早い時期にできた村誌「鑄銭司村」（昭29内田伸著 現在は山口市に合併）から二、三の例を拾つてみる。（筆者が、印を付した語など方言と思われる。）

子守唄（356ペ）

○ねんねこよ ねんねこよ ねたらおかかにつれていく おきた

らごんごに嚙ぶらせる ねんねんよ ねんねんよ

ことわざ（338くペ）

○頭大かん尻けんし。 ○医者とぼうぼうら古いがええ

はやし唄 (359ペ)

○えいこときいた十聞いた とを 背戸のはんど。を ちちめいだ。

四、防・長方言の語彙を採りあげた文献と

その語彙例

今、代表的なものとして左の三書をみる。

1 方言物類称呼 (越谷吾山) ……	6	周防方言	長門方言
2 本草綱目啓蒙 (小野蘭山) ……	87	62	5
3 俚言集覽 (太田全齋) ……	62	10	31

(1) 物類称呼は越谷吾山の編。重点を東部におきながらも全国的に方言を収集した第一書、収めた地方語は3648語である。うち

周防方言 川童—えんこう かはたらう—えんかう すほん—にて
まがめ 蝸牛—まいまい あさぎ—えんこういもば 合歡木—ひぐらし (以上6)

長門方言 信夫翁—沖のたゆふ 楠—こがいの木 近づきになる—べつしてになる 何ごとじや—何ちふ 他の呼に答る語—あつつ (以上5)

(2) 本草綱目啓蒙は小野蘭山の著。徳川期に栄えた本草学の研究・本草にとりあげた物を名と一致させる為に行われた方言の調査、の大成書として本書をあげる。この書には、杉本つとむ氏の研究調査あり、採集された方言は約二万語の由、うち周防方言は87、長門方言は31を数える。国別を付記した方言索引が附録されているの

で、就いて参照されたい。

(3) 俚言集覽 (太田全齋原著)

幕末に出た綜合辞書であり、江戸語の集大成である。原著の凡例第八に、

一 余江戸に少長せり故に集中江戸の語什が八九にあり……

と。現在書は井上頼囿、近藤瓶城らが増補し、あいうえお順に編成替えして明治33年に刊行せしもの。増補版凡例第八に、

一 原著凡例に見ゆることく俚言諺語もと江戸を専らとせられしも著者の意もとより是れをもて足れりとせしにあらざ故に今四方の言に採りて増補す……

と。本書は雅言集覽に対し、俚言・俗語を編集し収むる所凡そ四方語、原著は江戸語を主とし、増補版は四方の語を採りて補う。各語は一々出所を示すのではないが、文中往々に○○方言と書するものを抽出すれば、全国各地に亘る。周防方言としてあげる62語、長門方言の10語を左に記す。

周防方言

あゝめーがぎみ

エンカウイモバーあさぎ

どんこう—石伏 (魚)

しほりの女房—青蛤

いちときばな—まんじゆしや

け

ぼどう—辛

うしかひ—なかにし

あけがひ—貝の名

あんたんですか—御免下さい

(徳山)

こと／＼かへる—青かへる

うしのひたひ—いちじく

せとかひ—いの貝

うぐら—うころもち

えせび—木の名、榎木

江戸こんがうーツメレンゲ

おにしばーひいらぎ

きこりむしーがてんむし

すどりーかはせみ

かんやいー時候

ごつばをーえらい

さるとりぐいーふちとりばな

しやくーしやく(蝦)

しろものー情夫

づねをこーすづめむぎ

すめりひゆーすべりひゆ

そをけー笹

たけるー呼ぶ

ちやぎー痘痕

ととこー犬の子

いはかたーにし

ねじあげたー晴

のんこー小僧

ひどこー曲突

ふといー大なること

ほんこー愛子

もかりー石蛇

ととこ草ーえのこ草

をさむしーえんぎむし

えんこうー河伯カッパ

もくだかにこざりー蟹

エンコウー川太郎

くじくるー叱る

ごをさんー御娘様

しやうびーわすれ草

じようにー澤山

すづめのひしやくー半夏

わかめーすつぽん

ぜにかめー朱藍

そをらーたわし

たへがたいー恥かしい

つるるー井戸

うしかひーいはにし

にユうだうー癩病

ねずつちやうーねずもち

はがまー釜

おにしばーひらぎ

ぼどうーとうのいも

ぼんぼらー灰吹

山の神のぜにー自然銅

をこー天秤棒

計62(うち原著15 増補47)

長門方言

いしまめーまめこけ

かざうーかざみ

てやきしばーあせぼ

ほんそーかあい

しちぶんーやもり

カキヅネ
昇槽ー釣台

しちぶんーやもり

ねずみちやうーねずもち

せんねんーみぞさざい

かにぐさーえのこ草

計10(うち原著2 増補8)

◎(番外資料)「各地方言訛音集」

この本は国研大田文庫蔵の稿本一冊、和紙96枚綴。著者未詳ながら、明治期に逐次書き継いだものらしくなお餘白を残す。多くは訳語を下段に示すが、中には欄外に方言だけをメモした部もある。大田一郷語書誌稿の続篇に短かい解説が載るが、一般には知られていないものなので、防長関係の部を左に抜き書きする。

周防徳山(36語)

オゴーサン。内室

サン。サア。シウ。ハー。マー。

タユー。神官 ホーハー(男主)

サエ。成サレ

マヘー。遊ひまへー

ダイ。美しき死単に(メ)だい

カンペウ。大根の干したもの

彼岸坊主。つくくし

ゴーサー。娘

オビー。尼僧

サエセンカ。なされませんか

スナ。スカ。なざるなざるなか

ヤウズ。紙薦紙薦なり揚頭の義か

ローマ。春菊といふ 菜

シゴー。掃除、洗濯

タヘガタイ。耻カシキ

ヨツポドツイ。甚だ

コト、気の毒ナルコト

ツドヒ。差支ヲイフ

ヤライ。柔順の意

ヤニコイ。残忍

ネンゴウ。小理窟、又ハ大人振

コレサー。オイ〜

オカタ。本院の内室

山口県中部(26語)

オセ 大人

ニーマ 兄弟

ネーマ 兄弟

ゴウサマ お嬢さん

ダイゴ 田舎

ノフードーモノ 悪性者

テユウンゴツポウ 非常に

ドタイ悪い 誠ニ悪い

チイト。チビット 小さし

ソネイナコト そんなこと

ドウタン 戯談

(欄外に) イヌル||帰る

ゴザンス||ござります

ヤカマシイ。面倒ナ意

ホソイ。幼稚トイフ意

ヒヤイ。冷

ゼンキ。頑固

ゴイス。御座る

オマー。私ノ意、小児間に用る

る

ダンサン。若旦那サン、寺院ノ

子息ヲ呼ブニ用ル

オト、 父母

オカ、 父母

アツバイサマ 御部屋さま

何某マア 何某さん

テゴ 手助

ソーカ 娼妓

ドヒヤウシムナイコト 大変な事

オホゴト 大変或は沢山

マア〜 オヤ〜

アノソ、コノソ あれこれ

ミテル なくなる

ハナエテ||嬢々

何々チウタマイ||何々といった

長州萩町(14語うち重複するもの2)

ホウトクナイ 不潔

ホロケル 落る

アバイ 衣服

オタイガタイ お気の毒

ソウケ 箆

ゴウマ。ゴウ〜 嬢さん

ゴーマ 嬢サン

(欄外に21語)

ドーラク|| クチナワ||

ソーケ|| オキ||

ドボクル|| ヨゴドル||

シヨンベ|| ケツ||

サバイ|| グズ||

ニーマ||兄さん

ネーマ||姉さん

ハシリ|| ハンド||

ヒドイ|| ナシテ||

ガニ|| トンボ||

ヘンテコ|| ノロイ||

アノソコノソ||あれこれ

エライ 劣れる

シワク ひしやく

イシツギ お鉢

ヨコズリ 楊子

テナアハヌ 始末にならぬ

ダンボウ 坊ちゃん

エライ 劣れる

オタイガタイ 気の毒な

結 び

(1)昭和12年、重木多喜津の長門方言集が出た時、柳田國男は序して
いう。

……とにかく一巻の方言集もまだお付けにされて居らぬ県といへ
ば、山口の外にはもうさう多くは無いのである。……

だから重木氏の採録した長門方言集が意義ありとする。

(2)昭和39年刊の「日本の方言区画」(日本方言研究会編)の附録に

「方言作品書目」表がある。明治以降昭和38年7月末までに出た方言作品の目録で、府県別に担当者を選出依頼してまとめたもの。多くは30行、20行あり、少なくとも10行内外なのに比し、山口県分はたった5行で、全国最少である。

(8) 今回の調査を省みても、調査の不十分もさることながら、案外に資料は少なく、防・長の方言文献・方言語彙は多くはなかった。

以上を通覧すると、他と異なる言い方、違う語彙・俚言を取りあげる式の旧方言研究では、徳川期の防・長、現今の山口県を通じて、その活動が必ずしも盛んではなかったのではないか。従ってそのような文献、殊に方言文学の如きは、元来乏しかったのである。それは防長方言そのものが、本来目を見張るような特異さがなく、四方の言葉に比べて差し障りが少なく、通じ易い為であろう。思ふにその原因は、

1 防長は山陽道の西端に在り、その山陽道は奈良期の古から一級の交通要路であり、人の往来が多かった。

2 防長は三方を海に囲まれ、瀬戸内海は昔から海上の道として栄え、日本海側も徳川期は北前船の航路として他国人との接衝が頻繁であった。

3 近古に防長を中心に栄えた大内氏は、東は安芸の諸地方、西は豊後など同時支配していた。

4 その後を継ぐ毛利氏も、始めは中国地方を広く領有したし、関ヶ原の役後は防長二州に退いて三百年間支配したので、この二州間における差異は僅少であり、その本拠も広島から萩に移り、最後また山口に移ったので、それらの間にも自ら共通性があった。

● 徳川期における防・長方言の文献・語彙資料の一、二

5 アクセントが東京アクセントに属し、徳川期は江戸語と、現在は東京語を中心とする共通語とほぼ相通じ、違和感の無いこと。などが挙げられよう。

今や方言研究は単なる俚言の収集ではなく、一地方の言語体系全般の究明である。山口県でも、先に山中翁の山口県方言辞典成り、現在は西に岡野信子氏（下関市、梅光女学院大）及びその研究グループ、中央に添田建治郎氏（山口大）、東に中川健次郎氏（徳山高教頭）、その地の新進あり、着実な研究が進められ、成果が次々に報告されているのは頼もしい。